



震災直後の宮古市田老。巨大防潮堤付近には大量のがれきが散乱していた=3月12日



震災から約3カ月後。がれき撤去が進み、地域再生に向け歩み出した=6月20日

(奥州支局・熊谷宏彰)
震災から約3カ月後。がれき撤去が進み、地域再生に向け歩み出した=6月20日

東日本大震災から間もなく9ヶ月。被災地の住民たちは仮設住宅で生活再建を図り、漁業や農業再生の試みも進む。新たなまちづくりの議論が本格化する一方、高台移転や土地利用など課題は山積みで、復興に向けた正念場はこれからだ。震災直後と6月に現場取材した本紙記者たちが、再び歩いた被災地の「今」を報告する。

(この企画は17回続き)

生徒一丸

解体作業の収束で重機音が消え、ひっそりと静まり返る商店街跡。国道45号の西、館が森地区の山手に向かうと田老一中(佐々木力也校長、生徒131人)の校庭で駆け回るジャージ姿が見えた。

3月11日。生徒たちは学校の裏山に避難して大津波の襲来から逃れたが、校舎は被災。

仮復旧する9月20日まで近くの田老一小学校に間借りして学校生活を送った。約50人が

仮設住宅から通学し、失業保険や生活保護などの公的経済支援を受ける家庭は約90人に上る。

生徒会員の改選で11月、新生徒会長に就任した加藤諒太君(2年)は「いたいいたい。大変な時期だが、生徒会支援に少しづつ恩返ししたい。変な時期だが、生徒会を盛り上げていく」と使命感に燃える。

浜では11月下旬にアワビ漁が始まり、口開けの朝、約90隻の漁船が一斉に海へと繰り出しました。田老町漁協(小林昭

が、元気があるだろう。だが、先人から脈々と受け継がれた互助精神で乗り越え、本格復興の道が切り開かれる期待を抱く局

面もあるだろう。だが、元気を出すと無理さも痛感し、趣味をやめることなく、元気を出してほしい。また、元気を出してほしい。また、元気を出してほしい。

元気を出してほしい。また、元気を出してほしい。

元気を出してほしい。また、元気を出してほしい。